



TITLE:

農業発展におけるむらの機能に関する研究:特に部落有林野の利用を中心として(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

高山, 敏弘

CITATION:

高山, 敏弘. 農業発展におけるむらの機能に関する研究:特に部落有林野の利用を中心として. 京都大学, 1972, 農学博士

ISSUE DATE:

1972-01-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/213822>

RIGHT:

氏 名	高 山 敏 弘
	たか やま とし ひろ
学 位 の 種 類	農 学 博 士
学 位 記 番 号	論 農 博 第 349 号
学位授与の日付	昭 和 47 年 1 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	農業発展におけるむらの機能に関する研究 —特に部落有林野の利用を中心として—
論文調査委員	(主 査) 教 授 岸 根 卓 郎 教 授 三 橋 時 雄 教 授 坂 本 慶 一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文はわが国のむらが資本主義的農業の発展過程において、どのような機能を果たしてきたかを、むらによる部落有林野の利用を中心に理論的、実証的に解明しようとしたものである。むらは領主社会では貢納単位として、また自治組織体として重要であったが、私利利潤を追求する資本主義社会となった今日においても解体されることなく存在し、かつこれからも存在しつづけるものと考えられる。このことはむらがいかなる時代においても変わることのない存在意義をもつことを意味しているが、本論文はその理由を歴史を通してむらが果たしてきた種々な機能に求めようとするものである。そのため、本論文はこれを以下の構想の下に論証しようとする。

第1は、資本主義下の農業生産においても、なおむらが存在する理由をむらの果たす機能に求め、それを農業の空間性、時間性、技術的特性を中心に理論的に明らかにし、これよりむらがたんなる生活集団としてではなく、生産集団として重要な経済的機能を果たしていることを実証する。

第2は、わが国農業の資本主義的発展過程において、むらの果たしてきた機能をとくに農業技術の展開過程に即しつつ明らかにし、これよりむらが作目の試作や新技術の導入に重要な機能を果たしていることを実証する。

第3は、農民が生産対象である土地をとりこみ農業発展に資する場合に、むらの総有的性格をもつ部落有林野をどのように企業的に利用するかを明らかにし、これよりむらが部落有林野を農業的には農企業用地として、また林業的には植林企業用地として企業利用をする機能について実証する。

第4は、農民が新技術を採用し、土地をとりこみ、農業発展をうながす場合に、いかにして組織的運営のための部落計画を行ない、農村計画をたてるかを明らかにし、そのためにむらが農民の個人をこえる共同に果たしてきた機能を実証する。

以上の構想の下に、本論文はわが国のむらが農業の生産集団として機能し、農業の転換期にはつねに各面で新しい機能を担当し、農業発展に欠くべからざる存在であることを理論的、実証的に明らかにしたも

のである。

論文審査の結果の要旨

これまでのむらに関する研究の多くは、むらの村落共同体的な性格を明らかにすることであり、そこでは耕作強制をとまう上層農の下層農支配などにみられる封建遺制の弊害が強調され、むらは農業発展の阻害要因であるとの見方が大勢をしめていた。これに対し、本論文はむらは資本主義的農業の発展において、その諸機能を通じて、積極的に個別農家の発展をうながす農業発展の促進要因であるとの新たな見解を以下の諸点より実証したものである。

第1に、これまでのむらに関する研究の多くは農村社会学的、民俗学的、集落地理学的接近であり、そこではむらの生活集団としての意味が強調されてきた。これに対し、本論文はこれまでほとんどとりあげられていなかったむらの生産集団としての経済的機能を明らかにし、この面よりむらが農業発展のための促進要因であることを実証した。

第2に、本論文はこれまで明らかにされていなかったむらの企業機能による個別農家の危険負担の一部担当の事実、たとえば個別農家による新技術や新作目の導入などにともなう危険負担をむらの総有的性格をもつ部落有林野の農企業的、林業企業の利用によって一部担当するなどの事実を明らかにし、従来の入会権を中心とした法制的視点からのむらの遺制的生産・生活機能とは全く異なったむらの企業機能を指摘し、この面からもむらが農業発展のための促進要因であることを実証した。

第3に、従来の農村計画に関する研究はむらの機能を無視した行政的観点からする考察が多かった。これに対し、本論文は農村計画の背後にはかならずむらの機能を中心とした部落計画があり、そこでは個別農家をこえる共同の計画のあることを明らかにし、この面からもむらが農業発展のための促進要因であることを明らかにした。

以上を要するに、本論文は農業発展に果たすむらの諸機能について理論的、実証的な考察を行ない、それを体系化したものである。その考察の中心を貫くものは、農業発展における企業機能の未分化・分化・統一の展開過程と並行して、むらそのものも未分化の村落共同体的部落の段階から技術的経済的共同を要求する機能的生産集団としての統一ある部落へと転化し、たえず生きた存在として農業発展のために機能しつづけることの解明であり、その過程において、本研究は農村社会学、農林経済学の各分野に種々な新見を加えた。

よって、本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。